

加藤製作所は1888(明治21)年創業の鍛冶屋「かじ幸」がルーツだ。「匠の心を現代に」の精神で、プレス板金部品の総合メーカーとして技術向上に努める。シルバー雇用の導入で「コンビニ工場」化が実現し、正月とお盆、ゴールデンウィーク以外は土・日曜、祝日も操業している。補充採用と、定年を迎えた正社員の新採用で、シルバー社員は約40人に増えた。人数では正社員約50人に迫る勢いだ。

加藤製作所社長 加藤景司さん㊦

「この年で動められるなんて」。そう言って生き生きと働くシルバー社員。その存在は正社員にもいい影響を与えているという。

教えるには指導力がある。シルバーの人たちが交じって、いい「ものづくり」ができるようにしなければならぬ。取引先に「シルバーが作ったからごめんなさい」とは言えませんから。自分の親くらの年の人にとりやって教

げんき白書



長沢英次撮影

広がる活躍の場



工場働くシルバー社員の女性に声をかける加藤さん

えるか。そう考えることが刺激になるんです。指導することを通じて正社員の能力も高まりました。

誤解してもらいたくないんですが、あくまでもステージの主役は若手の正社員なんです。シルバーは脇役。サポートです。高齢者ははっきりとは思われたくない。若手と高齢者とのベストミックスを目指しているんです。少子高齢化社会の縮図ですよ。少ない若い人たちが多くの高齢者をリードするような世の中になる。若い人たちがシルバーといっしょになって、いかにいい会社をつくるかが大切です。

加藤製作所は02年、厚生労働省などが主催する全国高齢者雇用開発コンテストで最優秀賞を受賞した。地方都市の中堅企業に全国の注目が集まり、各地の経営者団体などの見学が相次ぐ。韓国(次回はケオの吉川恭史社長の

やフランスの新聞社も取材に訪れた。シルバー社員を製造部門だけでなく間接部門にも広げました。総務には元郵便局長さんがいます。営業や技術担当にも60歳以上を採用しました。

「在宅」という新しい形もあります。うちの関連会社のビル管理会社で、大手に勤めた経験者を採用しましたが、名古屋在住なんです。名古屋で仕事がある時に働いてもらおう。(会社がある)中津川から名古屋へ行くのはそれだけで大変なので助かっています。

派遣も考えたことがあるんですよ。うちからシルバーの人たちを派遣して他の企業でがんばってもらうことを。高年齢者の活躍の場はこれからどんどん広がっていきます。

聞き手・長沢英次